短編ガラクタ部屋

武太珸瓏

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何となく思い浮かんだ話を、何となく綴ったものです。
特にジャンルはありません。
物語もオチも曖昧な、変な話やシュールな話が多くなりそうです。
各話は独立した物語なので、どの話から読んでいただいても構いません。
稚拙な文章ですが、何となく読んでみたい方はどうぞ。
もし、どなたかに楽しんでいただけたら嬉しいです。

２０１７／７／１４
「影は銀色（前・中・後編）」を、チラシの裏に移動しました。
２０１８／５／１６
タイトルを「即興短編の部屋」から、「短編ガラクタ部屋」に変更しました。

目次

闇ヲ漂フ・・・ 1
ほうき星 10
沼小僧 21
震エル紐（前編） 33
震エル紐（後編） 46

闇ヲ漂フ・・・

その世界には、初めから始まりなんてものはありませんでした。
無限の過去から、そこは純粋な闇だったのです。
どこまでも、どこまでも、どこまで行っても、ほんの僅かの斑(むら)さえ見つからない、漆黒の世界。
混じり気のない、真の闇。
乱れなき澄んだ空間。
長い長いあいだ、そこは無と静寂の世界でした。
ところがあるとき、そんな世界に変化が起こりました。
一体どこから現れたのでしょう、それまでとは全く異質な闇がやってきて、初めから存在していた闇へ重なったのです。
そのうち、次から次へと新たな闇が現れては重なり続け、闇は次第に密度を増し、元の闇より暗く、元の黒より黯(くろ)く、濁り、混沌としてゆきました。

――おーい、戻っておいでよーう・・・

遠くから、誰かの声がする。
知っている声のようだが、誰のものなのか、どうしても思い出せない。
私はその呼びかけに応えようとするが、まるで何か強い力で喉を締めつけられているように、全く声が出せない。
そのとき漸く私は、自分が何も見えない闇の中を、ゆらりゆらりと漂っていることに気がついた。
墨やインクの黒などではない。
もっと濃密な、鉛のように重い闇。
一体、ここはどこだろう?
試しに手足を動かしてみる。
ヌメリ。
不快な肌触りがした。
周りの闇が、身体にドロッと纏わりついてきた。

匂いも味もしないが、腐った油のような感触で、得体の知れない生き物に全身を舐めまわされているようで、吐き気を催すほど気持ちが悪い。

そしてそいつらは、ただの〝物体〟でもないらしく、人間とは異質ではあるが、知性、感情、意識、などといったものを持っているようだ。

何というか、〝想い〟の波のようなものが、私の精神を直に刺激するのだ。

何百万、何千万、もしかしたら、それを遥かに大きく越えるかも知れない数の、どす黒い意識の集合体。

どこにも逃げ場を与えられず、長い時間をかけて、ひたすら蓄積され続けられてきた悪意の澱。

悲鳴をあげようとしたが、闇の圧力に抑えられて、うめき声さえ出てこない。

だから必死にもがく。

この身を取り巻く不快なモノから、一刻も早く逃れようと。

しかし、闇はねっとりとした粘着力で私の動きを封じ、また、どちらの方へ向かえばここから抜け出せるかの見当もつかず、自分が上を向いているのか、下を向いているのかも判らず、無我夢中で抵抗しても、虚しく疲労だけが溜まってゆく。

そして、そんな疲労感はやがて、重い倦怠感となり、次第に深まってきた絶望感は、諦観のようなものに変わっていき、自分と、自分を囲繞（いじょう）している闇との境は曖昧になって

くる。

――ねえ、何してるの？

――早く帰って来いよーう・・・

おそらくこの闇の外からだろう。
再びあの声がする。
誰のものか判らないが、馴染み深い声。
心なしか、切実な悲壮感が伝わってくる。
しかし、私にはもう、それに応える気力は残っていない。
うるさいなあ、もう、ほっといてくれ。
もう、そっとしておいてくれ。
私は疲れた。
このまま、静かにさせて欲しい…

すると、闇の底の方から、今までとは別の声が聞こえてきた。
どこか楽しそうな、遊びにでも誘うような声が。

（そうだよ、僕らの仲間になりなよ）
（私たちの世界にいらっしゃい）
（そうすれば、楽になれるから）

キャハハ、という感じの囀り声も混じっている。

ああ、それもいいかな。

そう思った途端、闇に変化が起こった。
それまで、ただどんよりとしていた闇に流れが生まれた。
私の身体も流されて行く。
私は、それに身を任せた。
このまま闇に身を委ねれば、そのうち私の身体は闇に溶け込み、闇と同化し、果ては闇そのものへと成ってゆくのだろう。
それでもいい。
ああ、それでもいい。

もう、どうにでもなれ。
私はもう疲れた、疲れ果てたんだ。
もう、いい・・・

・・・
・・・・・・・
・・・・・・・・・・

！
いいのか？
本当にいいのか!?
突然、私の中に僅かに残っていた何かが爆ぜた。
まるで、消えかかった炎が一瞬燃え上がるように。
私は、カッと眼を開いた。

（どうしたの？）
（早くおいでよ）

相変わらず闇の底から誘いの声がするが、私はそれを振り切り、今まで以上にもがいた。

最後の力を振り絞って足掻いた。

すると、闇の向こうに、一点の光が見えてきた。

――おーい、こっちだよーう・・・

私にとって懐かしさを感じさせるあの声が、その光の方から聞こえてくる。

真摯な訴え。

必死の呼びかけ。

私は本能的に、そちらに向かって泳ぐように手足を動かした。

闇の底からの誘いの声に逆らって光へ向かって進むことに、私がどれだけ気力と体力を要したか……如何なる文句を用いれば、それを伝えることができるのだろう？

苦しい。

少しでも気を抜いたら、たちまち闇へ引き戻されてしまいそうだ。

しかし、それでも私は何故か、その誘惑に耐えて進まなければならないという使命感に駆られていた。

夜空に一つ輝く、針の先ほどの星のようだった光の点は、やがて満月ほどの大きさになり、人の頭ほどになり、とうとう身を包むほどの光のトンネルになった。

近づくにつれて、その光からは、ほんのりと温もりが漂ってくる。

相変わらず、闇の底から誘いの声は続いていたが、もう迷いはなかった。

私は目の前に開いた、光のトンネルの中へと突き進んで行った。

――お帰りなさい…

初めは、小さな小さな光の点でした。

長い長い時間が経ってから、そこへ、どこからか、ほかの光の点が引き寄せられてきて、重なりました。

そのうち、次から次へと新しい光が重なってゆき、やがては熱く燃えたぎる炎の塊と

なってゆきました。

《「闇ヲ漂フ…」おわり》

ほうき星

その夜、僕は家族の目を盗んで家を出た。
初夏とはいえ、やはり宵の空気は冷える。
自分にはやや長すぎる丈の綿入れ半纏（はんてん）の裾を引きずりながら、村はずれの高台を目指して歩く。
病身の体を圧（お）しながら。
どうしても〝それ〟を見たかったから。

「まだ消えねえのか、あの〝ほうき星〟は？」
「ああ。気味悪いったら、ありゃしねえ」

あの星が出るようになってから、僕の寝ている部屋にまでも、そんな世間話の声はよく届いてきた。

「知ってっか？　あれが一番近くまで来るとき、この地上の空気が持ってかれっちまう、ってえ話だとよ」
「オレの聞いた話じゃあ、あの尾っぽから毒を撒き散らしているらしいぜ」
「ここんとこ、良くねえことが続くのも、きっとあれのせいヨ」

迷信深い村の年寄りたちは、ほうき星を不吉なものだと決めつけている。
我が家でも、空が薄暗くなってくると、
「これこれ。ほうき星が出とるのじゃから、空を見てはいかんよ」
と、婆ちゃんが素速い動きで家中の雨戸を閉めてしまう。

でも、僕は知っている。あれは塵や氷の塊が太陽に反射して光って見えるだけだって。そう本に書いてあったんだから。
ほとんど学校にも行けず、外で遊ぶこともできず、ずっと床に臥せっていた僕にとっての一番の楽しみは、親や親戚のにいちゃんのお譲りの本を読むことだった。
本は良い。布団の中にいても、遠い未来や見知らぬ密林の奥地、地球の外にだって連

れて行ってくれる。
気の遠くなるような昔のことから、最新の発見、発明のことまで教えてくれる。
新しい医術についても。
元来、我が家は、両親とも健康長寿な家系だ。親戚は、風邪など一度もひいたこともないような、百歳を越えてもピンピンしている爺ちゃん婆ちゃんだらけだ。
そんな血筋の子なのに、何故か僕は病弱に生まれてしまった。成人できるかどうかさえも怪しいと、大人たちが僕について話しているのを聞いてしまったことがある。
家族は、僕を大切にしてくれるし、贅沢なものでなければ、欲しいものは大抵与えてくれる。
ただ、一人で外に出ることだけは許してくれなかった。

そのほうき星が、数十年ぶりに地球に近づいてくるのを知ったとき、僕はもう決めていた。
ほうき星を見よう。
我が家の夜は早い。
家族が寝静まった頃、綿入れ半纏を着込んで、僕はそっと家を抜け出した。

民家の明かりも疎(まば)らな暗い夜道。
お化けや妖怪の話は好きだけど、その実在を僕は信じてはいない。
それでも、自分の足下さえも見づらい暗闇は、何かが潜んで居そうだと思わせる。やはり、闇は人間にとって本能的に怖いものなのだ。
時おり立っている街灯は、古い為か光が弱いうえに、不規則に点滅したりして、かえって不安感を煽る。

「わっ！」
草に足をとられて転んでしまった。
ちょっと涙目になりながら起きあがる。
膝に擦り傷ができた。ヒリヒリする。
大丈夫、大したことない。
僕は涙を拭って、再び歩き始めた。
田んぼの畦道を渡り、もうじき林道を抜ける辺りで、古木に寄りかかって、しばらく息を整えた。そしてまた進む。
やがて視界が開けた。目的地の高台に到着したのだ。空を見るのには何の障害もな

い場所だ。
顔を上げた僕は「おや?」となった。
そこには、もう既に先客がいたからだ。
会ったことのない、一人のお爺さんだった。
小さな村とはいえ、ほとんど家を出ない僕だから、外で知らない人に会うこと自体は、別段、不思議がることではないのだけれど、迷信深いこの村の年寄りならば、今頃は家に閉じこもってそうなものだ。
それなのに、わざわざこうして星の見えやすい場所まで足を運ぶ酔狂な老人がいるなんて、まことに奇妙なことだった。
そのお爺さんは、どこか垢抜けた服装をしていた。しかも、意外と似合っている。この村の若者だって、こんなに洗練された格好はしていない。
頭には品の良いソフト帽。杖はついていたが、背筋もそれほど曲がっておらず、矍鑠(かくしゃく)とした印象だ。もしかしたら、都会の方から来た人なのかも知れない。
「こんばんは」
若干警戒しつつも、とりあえず僕は、その老人に挨拶してみた。
「おお、来たね」
老人は、なんとも面妖な返答をしてきた。まるで、僕がここへ来るのを知っていたか

のような口ぶりだ。
僕の中の警戒心が強まる。
しかし一方では、この謎の人物に対する好奇心も、沸々と湧き上がっていた。
「こっちへおいで。星を観るのに、ここは正にベストスポットだ」
結局、好奇心の方が勝った。
彼の言葉の中に、耳慣れない語句が含まれているのが気になる。
僕はそのまま彼の側まで寄っていった。
「そうだ、その前に傷の手当てをしなくちゃね」
「え？」
老人の、あまりにも意外すぎる発言に僕は固まる。
「君、ここに来るまでに転んだのだろう？」
「どうしてそれを…」
「ちょっとごめんよ」
僕が身を引く間もなく、老人は身をかがめて、僕の着ていた半纏の裾をはだけると、持っていた水筒（それもまた、見たこともない形状だった）の水で、先ほどこしらえた膝の擦り傷を洗ってくれた。
「つっ…！」

傷口に水がしみたが、彼はそれに構わず、
「足は大切にしなければね。尤も、君が大人になってから……」
半分独り言のように呟きながら、上着の隠しから小さな手拭いを取り出し、それで水を吸い取ってくれた。全てが手際よい。
その間、僕は改めて、老人の顔をじっくり観察していた。そうしているうちに、僕は何故だか、この人のことをよく知っているような気がしてきた。
どうも赤の他人とは思えない。
「さて、これでよし」
「…あ、ありがとうございます」
「では、一緒に天体観測をしようかね」
傷の応急処置を終えたお爺さんは、そう云いながら立ち上がる。
「あの…」
僕は恐る恐る、お爺さんに話しかけてみた。
「お爺さんは、ほうき星が怖くないんですか?」
「怖くはないね」
優しい笑みを浮かべながら応えてくれる。
あ、やっぱりどこかで見た顔だ。

誰だろう？　うちの親戚にいただろうか。
「あれは氷や塵の塊にガスが混じっていて、それが太陽に近づくと尾をひいたように見えるんだ」
これは驚きだった。僕の周りの老人で、ほうき星について、それだけ知っている人はいなかった。
「詳しいんですね」
「君だって、そのくらいは知っているのだろう？」
「はい、まあ…」
この人は何故、僕がほうき星について知っていることを知っているのだろう？
「お爺さんは、前にもほうき星を見たことがあるのですか？」
「あるよ」
老人は飄然と応える。
「つい昨日も〝別な場所〟で観た。けれども、これだけはっきりと観たのは随分と昔のことだ。〝私のいたところ〟では、これ程あの彗星を鮮明に観ることはできなかった。だから〝ここ〟へ来たのさ」
なんだか謎のような言い回しだ。
「あの、それって、どういう…？」

「まあ、いいじゃないか。せっかくの世紀の天体ショーだ。じっくりと堪能しようではないか」

お爺さんはそう云うと、視線を再び空へ戻した。その先では、神話の英雄や幻獣たちの間を、薄い尾を引いた光の球が浮かんでいる。

何千万里もの旅をして還ってきたほうき星。

「綺麗だなあ、こんなにまで綺麗なものだったのかね。空気が澄んで、余計な明かりがないからなんだろうな……」

また独り言なのだろうか、感慨深げにそう呟いている。

それを見ていて、僕は少し胸が苦しくなってきた。そして、少々突っ張ったような言葉が口から出てしまう。

「お爺さんは良いですね。こうして、このほうき星を、また見ることができたのだから」

「君だって、観られるかも知れないよ」

「僕は無理です。ただでさえ、このほうき星は周期が長い上に、僕は生まれつき体が弱くて、長生きできないらしいですから」

「いやいや、そう決めつけるものではないよ」

お爺さんは、何か確信を持っているかのように僕を窘(たしな)めた。

「確かに君も、これからの人生は苦労するだろうが、未来は何がどうなるか判らないから

ね。どんな状況も、いずれは過ぎる。最悪と思えた物事でも、過ぎてしまえば、自分はまだ恵まれた方だったと考えられるようになることだってあるさ、きっとね。
ただ、身体だけは大切にしなさいよ。今夜みたいな無茶はなるべく控えるようにね。そうすれば君も、またあの彗星を観ることかできるかも知れないよ」
僕の頭の上に、お爺さんの手が乗せられた。暖かくて、柔らかい手だった。
「さて、そろそろ戻らねば。これ以上はルール違反になってしまう。君も良いところで帰りなさい。そうしないと、風邪をひいてしまうからね」
頭の上の手が除けられ、
「では、ごきげんよう」
と、僕に背を向けて歩きかけたが、ふと立ち止まり、
「おお、そうだ」
何か思い出したように呟き、こちらを振り返った。
「君はもう、ヴェルヌの『月世界旅行』は読んでいたかな？」
「涙香（るいこう）の『月世界旅行』のことですか？」
「おお、そうだった。確か涙香で読んだのだったな、懐かしいな。君は、あんな大砲で月の世界へ行くような話は好きだね？」
「好きです」

「近いうちに、ああいう技術に幻滅させられるようなことがあるだろうが、どうか失望しないで待っていてごらん。今からあと六十年もしないうちに、とても素晴らしいものが観られるからね」

お爺さんは、そんな不思議なことを云うと、にっこりと笑う。

「では、今度こそ、ごきげんよう」

そして、被っていたソフト帽を一瞬持ち上げて挨拶すると、高台を降りる道を歩いていった。

老人の動きはしっかりしたものだったが、よく見ると、やや跛(びっこ)をひいていることに気づく。杖をついているのは、それを補助するためだろうか。

その姿が闇に溶け込むまで見送っていた僕は、ふと我に返り、「あのお爺さんは、一体いくつなんだろう、どこから来たのだろう」などと、ちょっと変なことを考えていた。

空には、ほうき星が明るく光っていた。

《「ほうき星」おわり》

沼小僧

【河童】
（かっぱ）

古来から日本各地に伝わる伝承上の生き物。
地方によってその伝承の内容は異なるが、大まかな形態や性質の共通点として、
。頭に皿、背中に甲羅、四肢の指に水掻きを持つ。
。水中に潜む。
。時には人を襲ったり、相撲を挑んだりする。
。河童に尻子玉を抜かれると腑抜けになる。
。頭の皿が乾くと弱くなる。
。胡瓜（きゅうり）を好む。
などがある。
地域によって様々な呼び名があり、本来は別種の存在である「ひょうすべ」「水虎」、さ

らには沖縄の「キムジナー」などと同一視されることもある。

（『寝武多先生のインチキ奇譚学』より）

◇

閉め切られた車窓から見える景色が、緑の山ばかりとなってから、もう随分になる。

目的の駅が近づくと、斜め向こうの席にいた着物姿の女性乗客が、茜色の風呂敷包みを持って降りる支度を始めた。

（こんな田舎でも、降りる人がいるのだな）

そういう僕も、横に置いてあった自分の荷物を手に取る。

やがて、煤けた窓の向こうに、見慣れた村が見えてきた。

汽車は僕らを降ろすとすぐに、真っ黒い煙をもくもくと吐き出しながら去って行く。

車内から解放され駅から出た僕は、蝉の五月蠅（うるさ）く鳴く田舎道を、手拭い片手に歩きだした。

しばらく歩くと、やがて右手にひとつの池が見えてきた。水不足対策に造られた人工

の池で、正直、見た目はあまり綺麗ではない。
幼い頃の僕には、まるで湖のように見えたその池だが、何度かこの土地を訪れる度に、少しずつ小さくなっていくように感じる。
特に今日は水がかなり抜かれ、実際に更に小さくなっていて、所々、泥やらゴミやらが露出しており、池というよりも沼といった様相だ。
それでも、小さい頃から見てきた風景だから愛着もあり、毎回ここを通るときには自然と目が向く。
鬱蒼とした木々に囲まれた、ちょっと陰気な溜め池。やかましく鳴く蝉の声。
そんないつもの光景の中に、突然、異物が飛び込んできた。
「ウギャァーッー」
そんな叫び声だった。
獣の声？　いや、人の声か？
その、喉の奥から絞り出したような声に驚いたのか、周囲の蝉たちが一瞬静まる。
叫び声の聞こえてきた方を見ると、池のほとり…というか、今は水が少ないので、池から少し離れた場所に、小さな小屋が一軒建っている。今まで特に気にしたこともないボロ小屋なのだけど、どうやらこの声はそこから聞こえてくるようだ。
激しく怒っているのか、苦しんでいるのか。沼の底から涌いてきたみたいな、おぞま

しい声色なのだが、その一方で、何かを訴える響きもこもっているような、そんな悲鳴だった。

叫び声は、一分か二分ほどするとおさまった。そして辺りには、鳴りを潜めていた蝉の合唱が、先ほどと同じようにやかましく響いていた。

僕は気を取り直して、止めていた歩みを再開した。この池を過ぎれば、目的の家はもうすぐだ。

先ほどの溜め池を、道や茂みを挟んで若干見おろす位置に、その親戚の家はあった。

その家には、一人のちょっと病弱な男の子がいる。何となく僕の弟分のような関係の子で、本が好きなので、たまにこうして、僕の読み終わった本を持って遊びに来るようにしている。

今日その子は、僕の来訪を知ると、わざわざ玄関まで来て出迎えてくれた。心なしか顔色も良い。このところ、会う度に元気になってきているように見える。

彼の家族から、少し丁寧すぎるもてなしを受け、夕飯とお風呂をいただいた後、あてがわれた部屋の蚊帳の中で、弟分（なんだか妙な呼び方だけれど、事情があって実名を出せないので、この呼び方とさせていただきます）と、本や活動写真の話をした。

あまり家から出られないその子は、特に活動写真の話などは、目を輝かせて興味津々

に聞いてくれた。そんな彼を見て、いずれ活動も、本みたいにポケットに入れて持ってこられるようになれば良いのにな、と思った。

そのうち夜も更け、彼は襖（ふすま）の向こうの部屋に引っ込み、僕も布団で休むことにした。

真っ暗闇の室内に、隣室からはあいつの寝息、外からは虫や蛙の声が聞こえてくる。昼間の蝉とは違って、どこか儚げな虫の声。僕の住んでいる町では、徐々に聞けなくなってきているその声を耳にしながら、だんだんと眠りにつこうとしていたときだった。

ペチャッ、ペチャッ、ペチャッ……。

初めは気のせいかと思った。外のどこかから、水っぽい音が響いてきたのだ。

ペチャッ、ペチャッ……。

しかし、気のせいではなかった。音は次第にはっきりしてくる。耳をぞばだててみると、それは何かの足音のようで、どんどんこちらへ近づいてきて、やがて僕の寝ている部屋の前で止まった。

そして、

タン、タン……。

僕の横で閉まっている、掃き出し窓の雨戸を遠慮がちに叩く音がした。

状況が状況なだけに、ちょっとビクッとする。あまり、お化けとか怪談の類は信じない方だけれど、泥棒だとか、強盗などといった、お化けよりも怖い、人間という現実的なものへの警戒心に体が固まる。

タン、タン。

タン、タン……。

音は、強さは変えずに、しかし執拗に鳴り続ける。

蚊帳から出た僕は念のために、本や荷物の詰まった鞄を即席の武器として持って窓際まで行き、外に向かって呼びかけてみた。

「誰ですかあ?」

すると、雨戸を叩く音がやみ、続いて、

「開けて、くんちぇ、開けてくんちぇ……」

と、若干かすれたような、弱々しい声が聞こえてきた。それが、なんだか人間の声ではないような気がして、僕の恐怖心が増す。

「こんな時間に、ご用は何ですか?」

「ミズ、ミズ……」

ミズ?

水のことだろうか?

喉でも乾いているのだろうか。
脅すというよりも、切実に懇願しているような声だ。
それにこの声、しわがれてはいるが、よく聞けばどうやら子どものものようだ。
「ちょっと待ってて」
雨戸の向こうにそう言うと、僕はこの家の台所まで行って、コップに一杯の水を汲んで、雨戸の前に戻った。
そして、相変わらずの不安は感じつつも僕は、旧(ふる)いネジ式の鍵を回してガラス戸を開け、一瞬迷ってから、思い切って雨戸を開いた。
そこには、一人の奇妙ないでたちの〝何か〟がいた。
ええと、少年……なのだろうか。
年の頃は、いま隣の部屋で寝ているやつと同じか、少し上くらい。全身はがりがりに痩せ細り、髪は乱れ、頭頂部から首の辺りまで、辛うじて顔にだけはかけずに放射状に伸ばしまくっている。
頭から足の先まで水でびっしょり濡れていて、髪からビタビタ滴り落ちている。
極端な猫背で、両手を若干前に出しつつだらんと垂らしていて、その両手の先からも水が滴っている。
そして、申しわけ程度に腰に褌(ふんどし)を巻いてはいるが、ほとんど全裸である。

そんな奴が、「ケケケ……」と言葉なのかどうか判らない声を発しながら、青い月の光に照らされて僕の目の前に立っていたのである。

はっきりいって、かなり不気味に感じたのだけど、雨戸を開けても、こちらに向かってくるようなことはせず、おとなしく僕のことを待っているようだったので、恐る恐る、持ってきたコップを差し出した。

少年はコップを受け取ると、貪るようにごくごくと水を飲み干し、

「アリ、ガト……」

と、コップを返してきた。

受け取ったコップを見ると、彼の手と口が触れた部分が、何故か泥のような黒いもので汚れていた。

うーん、ちょっとこのコップ、あとで事情を話して弁償させてもらおう。たぶん大丈夫だとは思うけど、念のためにね。

やがて少年は、ひとごこちついたのか、満足そうな顔を見せると、当然、両足を踏ん張るように開き、垂らしていた掌をこちら側に向けて、

「スンモ、スンモ……」

と、なんだかこちらをけしかけるような仕草を見せ始めた。

スンモ？

なんだそれ？
仕草を見た感じだと、一緒に相撲をとれとでも言っているのだろうか？
一体、何故？
疑問だらけで固まっていると、この家を囲む茂みのどこか遠くから、ガサガサッ、ガサガサッと何かが動いているような気配がした。
その途端、少年のようなものはビクッと反応し、何かに怯えるような表情をしたかと思うと、構えを解いて最初の体勢に戻し、こちらに向かって、
「ばい、ばい……」
と、一瞬ひかえめに手を振り、いきなり回れ右すると、茂みの中に飛び込んだ。
そして、しばらくしてから、
バッシャーンッ！
と、大きな水音がしたかと思うと、後には再び、虫や蛙の鳴き声が残された。
しばらく呆然としていると、やがて部屋の襖の戸が開き、隣の部屋から寝ぼけ眼（まなこ）の弟分が顔を出し、
「なにやってんの？」
と、呑気な調子で訊いてきた。
僕は、頬を掻き掻きちょっと考えてから、

「いや、なに。寝苦しかったから、雨戸を開けて水を飲んでいたんだけど、うっかりコップを庭に落としちまったんだ」

と、適当ないいわけをして誤魔化した。

弟分は、なんだか呆れたような、どうでも良さそうな顔で「へはっ」と笑うと自分の寝室に引っ込み、やがてまた、静かな寝息をたて始めた。

その次の日、村にはちょっとした騒ぎが起こった。

前の日の夜に、友人と呑んだ帰りの老人が、例の池の近くの道を歩いていると、目の前を小柄な影が、タタタタッ……と通り過ぎて、見えなくなったかと思うと、池の方から、バッシャーンッ！　という水音が聞こえてきたというのだ。

老人が、そのことを周りの人々に話しまわると、普段は大した事件の起きない、平和な村の人々にとって、これは野次馬根性を刺激する恰好の出来事だったようで、たちまち騒動となり、地元の新聞や警察が駆けつけるまでに至った。

警察が、老人の言う何かの影が走り去った跡を調べると、小さな粘着性の黒い泥の足跡が転々と、乾いた地面に付着していたという。

地元新聞の記事によると、その足跡は人のものには思えない、などと書かれており、村人たちの間では、「それは河童だろう」という話になり、それを更に新聞が報道し、やが

ては全国紙からの取材まで訪れるような事態となった。

そんな一連の騒動を横目で見ていた僕の脳裏に浮かぶのは、あの夜、僕の前に現れたあの〝何か〟のことと、同じ日の日中に、溜め池のほとりにあった小屋の中から聞いた叫び声のことである。

僕が小屋から聞いた声と、その夜に出会った〝何か〟。そして、老人の見た影と、翌日に見つかった足跡らしきもの。それぞれ関係あるという証拠はない。

僕が夜に出会ったあの〝何か〟。

あれは本当に何だったのか？

いや、誰だったのか？

僕にはあれは、人間のように見えた。

翌日に見つかった足跡。

人間の足の形ではない、などと言われていたが、僕が出会った少年らしき者は、痛ましい程がりがりに痩せていた。そんな彼の足跡が、普段、飢えることのない生活を送る人々には、人間の足跡には見えなかったのではないか？

これは飽くまでも推測である。

確認しようにも、その先で見たくないものを見てしまうことが怖くて、未だ確かめる

勇気はない。そのうち、確かめる手段もなくなるだろう。

この体験は、これまで誰にも話したことはなかった。あの日、隣の部屋で寝ていたあいつにも、僕の体験は話していない。

ただ、最近たまに友人たちと呑んだりした場で、どうしても誰かに話したい衝動に駆られたとき、あるいは、僕があの日のあの村にいたことを何処からか嗅ぎつけてきた物好きな人に訊かれたりしたときには、いつも、わざと冗談に聞こえるような調子でこれだけ言って、後はもう、その件に関しては沈黙するようにしている。

「子どもの頃、河童を見た」

と。

（『沼小僧』終わり）

震エル紐　（前編）

カッチカッチカッチ…

何処からか、規則正しい音が聞こえてくる。

それが時計の音だと気づいた途端、徐々に意識がはっきりしていき、やがて・・・・・・

「ヘークション！」

一つ、大きなくしゃみをして目が覚めた。

何か妙な夢を見ていたような気がするが、くしゃみと共に吹っ飛んで行ってしまったみたいで、どうしても思い出せない。ただ、頭がズキズキと痛む。何だか、深い海の底から無理やり一気に引きずりあげられた深海魚のような気分だ。

（う～、気持ちワリィ…。二日酔いか？　昨日は、そんなに呑んだ気はしないのだけど……）

枕元の携帯端末で時間を確認する。いつも起きる時間よりも、やや早かったけれど、気合いを入れてこのまま起きることにする。

幸い今日は休みだが、一人暮らしゆえ、ずっとこのまま寝ているわけにもいかない。溜まっている家事を、この貴重な休日中に片付けなければならないのだ。

物事を放置すると、乱雑さは増大していく一方。その逆は有り得ない。ほんの少しの怠慢でも、積もり積もれば、でかくなる。必ずしも無理する必要はないけど、とにかく少しでも動かなくちゃ。

とりあえず、薬でも飲もうかと立ち上がってみたら、クラッときた。目の前に火花が散ったようになり、耳鳴りがして、思わずうずくまる。

やがて目眩から回復し、ゆっくりと首を動かす。すると、妙な物が視界に入ってきた。

目の前の空間を漂う、一本の〝紐〟。

白っぽい色で、太さは細引くらいか。

まるで、水の中を揺蕩(たゆた)う藻のように、フワリ、フワリと空中を漂っている。

そして、どうやらその紐はなんと、自分の額から伸びているようだ。

もう片方の端は、この寝室の戸をまるで幽霊のようにすり抜け、どこかに向かっているらしい。

（はて、何だろう、これ？）

寝ぼけた頭が見せている幻覚だろうか。

なら、完全に目を覚ませば、これは消えるのだろうか。

しかし、徐々に脳が覚醒して頭がはっきりしてきても、紐は一向に消える気配はない。
好奇心から、ちょっと触ってみる。イヤイヤをするように震えた。心太（ところてん）のような感触だった。
頭から異物が生えているのに、不思議と肉体的な不快感はない。
さて、こういう場合には、どうすれば良いのだろう？
火事なら消防、泥棒ならお巡りさん。でも、こんな現象に遭遇したら誰を呼ぶ？
大抵の人なら困惑するところだろうけど、今の自分の頭には、こういう奇々怪々な出来事に詳しそうな人物が、一人心当たりがいる。とりあえず、その人に相談してみようかと、端末から電話をしてみた。
……。
反応がない。
相手が出ないのではない。
発信動作そのものが出来ないのだ。
圏外表示すら出ない。
ほかの知人友人、身内、公共機関に連絡をとろうとしたけど、やはりどこにも通じない。
固定電話でも同じ結果だった。

ここは、何の変哲もない、殺風景な四畳半。今あるものといったら……
種々雑多な書物が詰め込まれた本棚。
表面がボコボコしていて、うっかり何も敷かずに書き物をしようものなら悲惨なことになる机。
座るとガタガタして安定しない椅子。
未だ敷かれたままの布団。
どれも、見慣れたものばかり。
唯一のイレギュラーな存在は、震える謎の紐のみ。
途方に暮れて、目の前に漂う紐をぼーっと眺める。
眺める……。

どのくらいそうしていただろうか。
ふと我に返って、部屋の壁にかけてあるアナログ時計を見てみる。
（あれ？）
時間が進んでいない。
目を覚ました時から、長針も短針も全く進んでいないのだ。秒針はカッチカッチと音

をたてて動いているのに。
放心して感覚が常時とは違う状態に変化していたことを考慮に入れても、これはおかしい。
（時計まで壊れたか？）
しかし、携帯端末の時刻を見ても、同じように、表示が止まっている。
一体、何が起きているのか？
いくら考えても見当もつかない。

そのうち、この紐の先がどうなっているのか気になってきた。
自分の額に、紐の端っこがあるということは、これは輪っかのように閉じた紐ではなくて、開かれた紐のはずだ。ということは、必ずどこかに、もう片方の端があるはずだ。
部屋の戸を開ける。
紐は廊下に沿って、屋外へと続いている。
そのまま、紐にならって、玄関を出る。
外へ出てみて、思わず立ちすくんだ。
（オイオイ、何だよ、これは？）
そこには、何もなかった。

比喩ではない。
地面と空以外、本当に何もなかった。
見渡せば、辺り一面、草の一本も生えていない荒野。
空に雲はなく、代わりに、深い闇を背景にして、暗めの赤、青、紫などの色の光が渦巻いている。美しくはない。少なくとも自分にとってこれは、何とも気持ちの悪いオーロラだ。
時折、流星のような光が、地平の彼方へ向けて飛んでいく。そして同じ方向に、例の紐が伸びている。
そして、よく見れば、紐の揺らめきと、空の色の揺らめきが同期しているように見える。
地平線にも違和感がある。
何かが変だ。
何が？
そうだ、自分の思う地平線よりも近くにあるように感じるのだ。
盆地に住んでいるため、実際に地平線を観た経験はないが、水平線を観たときのことは、鮮明に覚えている。
子供の頃に旅行で海に行ったとき、沖へ向かう船を、双眼鏡でずっと追っかけて観続

けたことがある。
水平線まで至った船は、やがて下の部分から見えなくなっていき、最後に帆柱が水平線に隠れていった。
そのとき、幼心にも地球の大きさを実感したものだった。
しかし、目の前に広がる荒野の地平線には、あのとき程のスケール感はない。
何だか、写真や映像で見た、宇宙探査機に撮られた小さな天体（月だったり、ほかの惑星の衛星だったり）の地表の様子と感じが似ている。
もしかしたら、ここは地球ではないのか？
だとしたら、一体どこ？
恐る恐る、一歩踏み出してみる。
ジャリッと音をたてて、乾いた土の感触がした。
赤みがかっていて、所々ひび割れている。
数歩進んで、急に心細くなって振り返った。小さな一軒家が、頼りなげに佇んでいる。
（まさか、この家まで消えたりしないだろうな？）
ボロい借家とはいえ、大事な我が家だ。
無理してまで離れる必要はあるのか？
紐の行き先は気になるが、思い直してひとまず戻ることにする。

しかし、そのときは知らなかった。
戻る先で、思いがけない苦難が待ち構えていることに。
じわりじわりと攻めてくるそいつに、大いに悩まされることに。

大したことではない。
要は、途轍(とてつ)もなく暇になったのである。
全くもって、することがないのだ。

そのときになってようやく、電気、ガス、水道が一切使えないことが判った。
食料は、今ある物が全て。腐るものから無駄にならないよう食べて、保存のきくものは節約していかねばならない。
幸い、気候（と云っていいのか判らないが）は寒くも暑くもないから、エアコンが使えなくても、当面は困らない。
ＰＣは使えず、ＴＶも観られない。ラジオだってうんともすんとも云わず、携帯端末も、何処もつながらず、それどころか、保存していたデータもなんにも出てこない。娯楽といえば、四畳半にある本くらいか。
それでも、急迫した命の危機にさらされていない分、まだマシか。

とにかく、こうして凌ぎながら、そのうちこの異変が収束するのを待つことにした。

＊

さて、この奇妙なサバイバル生活が始まってから何日、いや、何ヶ月過ぎたのだろう？

相変わらず、なんにも起きない。

窓から見えるのは、気持ち悪いオーロラの舞う真っ黒い空と、荒野のみ。定期的に、TVを観ようとしたり、ラジオをつけたりするが、雑音さえも拾ってくれない。

そして額からは、相変わらず変な紐が生えている。

いい加減にして欲しい。

ただ一つ、判ったことがある。

水や食料が尽きてから、けっこうな時間が経つのに、全く喉の渇きも空腹も感じないということだ。おかげで、こうして長いこと何もしないで閉じこもっていても、飢え死にしないで済んでいる。

とはいえ、このまま何もしないでいることは、精神的に苦痛だ。

部屋にあるかつての愛読書、小説も漫画も雑誌も、全然おもしろくない。

こんな異常な状況下では、どんな娯楽も芸術も気を紛らしてはくれない。
いつも、何をしていても、窓の外には気味の悪い景色が見える。射し込んでくる光の揺らめきのリズムには、人間の心理に不安を呼び起こす効果があるのか、片時も落ち着かせてくれない。
だからといって、カーテンや雨戸を閉め切ると、完全な闇と静寂。脳に何の情報も入ってこないことが、これほど辛いとは知らなかった。
星空や青空、山の緑や川のせせらぎ、海の波、鳥や虫の声、あるいは街の雑踏、遠くに聞こえる電車のレールの響きなどが無性に恋しくなってくる。
何もしなくて良い、究極の自由な時間。
誰も傷つけず、誰にも傷つけられない。
ずっと欲していた世界を得ることができたわけだけれど、望んでいたのはこういうことじゃない。
このままでは、気が狂いそうだ。

ある時ついに決心して、何の荷物も持たず外に出た。
住み慣れた我が家を見上げ、軽く会釈する。
そして、紐の伸びる先に向けて歩き出した。

とにかく違う風景が見たかった。
そして、この紐の正体が知りたくてたまらなくなった。

それからはひたすら、歩く、歩く、歩く。ただ歩き続ける。
周囲の景色が変わらないため、果たして自分が進んでいるのかどうかすら怪しくなることもあるが、振り返れば、我が家が彼方ですっかり小さくなっているから、一応は前に進んでいるようだ。
案の定、いくら歩いても、疲れることはなかった。喉も渇かず、腹も減らない世界なのだから、もしかしたらとは思っていたのだ。
紐は、いくら歩みを進めても、弛(たる)んだりせず、一定の張力(テンション)を保っていた。
宿主の進行に合わせて縮むのか、あるいは宿主の額に吸い込まれていくのか、それとも進行方向に押し出されているのか。

一体、どのくらいの距離を、どのくらいの時間歩いていたのか。太陽も月もなくて、時を計れないため、皆目見当がつかない。数時間のような気もするし、数日かも知れない。数ヶ月だと云われても驚かない。

そうする内に、ようやく、待ち望んでいた変化が現れた。
前方に、人を見つけたのだ。
その人物もやはり、額から白い紐を生やして歩いている。
この異様な世界で初めて出会う、自分以外の人間。そして、その人は知った顔であった。
この異変に気づいた最初の日に、まず連絡をとろうとした人物だった。
「センパイ！　センパイじゃないですか」
声を掛けられたら人物は、一瞬驚いたようだったが、すぐに警戒を解いてくれた。
「やあ、君か」
「ご無沙汰してます。お元気でしたか？」
「そうだね、おかげ様で、こっちの方はまあまあだよ。この奇妙な現象を除けばだけどね。徹夜明けに仮眠をとって、目を覚ましたらこの有り様だよ。君の方はどうだい？」
「そうですね。私の方も似たようなものですよ」
お互い、そうして再会を喜び合い、自分の額から生えている紐をツンとつついた。二本の紐は、ビヨヨンと震えて、その振動は荒野の上を伝わっていき、しばらくすると、再び通常の揺れ方に安定する。
光がひとつ、地平線の空へ向けて飛んでいった。

（後編へつづく）

震エル紐（後編）

「一体、何がどうなっているんでしょうね、コレ……」
「さあね。もしかしたら、今の自分は体外離脱した魂で、この紐は何処かにある肉体とつながっているのではないか、とも考えたけれどもね、どうも違うようだ」
　センパイはそう云うと、此方の肩を軽くコツンと叩いた。
「ほら、生身の身体だ」
「確かに」
「なら、この紐の先に何があるのだろう？　そう思った途端、矢も盾もたまらなくなってね。こうして今、未知の荒野を探索しているというわけさ」
　センパイはそう云うと、カカカと笑った。こんなワケの判らない事態になったのにもかかわらず飄然（ひょうぜん）としている様が、実にこの人らしい。
　人と会って話すということを、これほど懐かしく感じるときがくるとは思わなかった。
　そして……。

センパイと会ったのを皮切りに、それまでの孤独が嘘のように、次々に知り合いと遭遇した。

学生時代の恩師。

人懐っこい性格だった幼馴染み。

欧州からの留学生なのはずなのに、何故か見事なまでのズーズー弁だった元クラスメイト。

皆、懐かしい顔ぶれだった。

そして、皆が皆、額から白い紐を生やしていた。

――やあ、ひさしぶり。

――元気だった？

――こっちは、ぼちぼち。

いつの間にか、旅は大所帯になっていた。ワイワイ、ガヤガヤと、非常に賑やか。その様は、何かの祭りか、民族大移動か。

そんな中では自然と、自分たちが、どういう経緯でここに至ったかが話題にのぼる。

「寝る前に風呂に入っていたら……」

「部屋を掃除中、座った状態から急に立ち上がったとき……」

「酒を呑んでると急に眠気が襲ってきて……」

どうやら皆、普通の日常生活を送っている最中に一瞬意識を失い、気がつくと自分の額から紐が生えていた、という点では共通しているようだ。

何故、このような事態になったのかを解明しようと話し合ったこともあった。

しかし、話はいつの間にか明後日（あさって）の方向へと進み、単なる雑談へとすり替わっていった。皆、この奇妙な事態に慣れてしまったようだ。

みんなして好き勝手に喋りまくり、喋るだけ喋れば、そのうち相手を替えて、また喋る喋る。疲れたり、腹が減ったりしないからノンストップ。不思議と話題は尽きない。

一体、この場に何百人いるのか。

これだけの人数が入り乱れているのに、よく紐が絡まないものだ。

しかし、そんな喧騒も永遠には続かなかった。合流してからずっと、同じ方向へ伸びていた各々（おのおの）の紐が、旅を進めるにつれ分岐し始めたのだ。

――あ、次は私だ。

――ついに君もか。

――じゃ、またね。

一人、また一人と、集団から離れていく。中には、紐に逆らってでも皆と一緒にいようとする者もいたが、長続きはしなかった。紐を辿って荒野へ踏み出したときにも沸き起こった「どうしても自分の紐の行き先を追わずにいられない衝動」を抑きれなくなる

らしいのだ。
　やがて元留学生も、幼馴染みも、恩師も去り、とうとう、いつかと同じように、センパイと自分だけとなってしまった。
「また、私たちだけですね」
「そうだな」
　二人きりになると、急に会話が少なくなる。別に気まずくはない。ただ、空っぽで虚しい。
「みんな、どこへ行ってしまったのでしょうね……？」
「判らない。ただ……」
「ただ？」
「ちょっと気になることがある」
「気になることって、どんな？」
「順番だよ」
「順番？」
「人の離れていった順番。みんな、合流したときとは逆の順で去っていったろう。後入れ先出しの形でね。気づかなかった？」
　気づかなかった。

そうだっただろうか？
そうだったかも知れない。
あまりにも大勢いたから、はっきりとは断言できないけれど、少なくとも、つい先ほど離脱していった人たちは、確かに初期に合流した顔ぶれだ。
ということは……。
「うん、どうやら順番が来たようだ」
センパイの言葉の通り、ついに、自分とセンパイの紐の分岐点が現れる。
「お別れだね」
「そう…ですね」
二人で握手。旅の仲間の人数が少なくなってからは、誰かと別れる度にこうしている。寂しくはあったけど、悲しくはなかった。そもそも、もう会えないと決まったわけではないのだ。
「じゃ」
「ええ」
センパイが背を向けて離れていく。小さくなっていく背中を見送っていると、自分の額の紐が、急かすように震えた。
「わかった、今行くよ」

一気に人がいなくなり、辺りが無音の世界に戻った寂しさを誤魔化したかったのか、思わず独り言が零れてしまった。名残惜しさを振り切り、紐の向く方向へ歩きだす。

＊

そこからはまた、孤独の旅が始まった。

知人、友人、恩人たちと一緒に歩いていた時間と、再び一人になってからの時間。実際には、そのどちらが長いのか。こんな風に全てが一様な世界では判らない。しかし、感覚的には、一人になってからの時間の方が圧倒的に長いように思えた。

自分は何故、こんなことをしているのだろう？

感情が麻痺して、そんな疑問さえも浮かばなくなった頃、

「あれ、ここ、前にも通らなかった？」

辺りの風景に既視感（デジャヴ）を覚え始めた。

「妙だな……」

独り言ちながら辺りを見渡す。

無論、こんな変化のない風景なのだから、明確に景色を覚えていたわけではない。

何の目印もない、曇り空の砂漠を歩いているようなものなのだから。

しかし、それでも、やはり今いるこの場所は、初めて見る気がしない。
いや、それもちょっと違うな。
この場所そのものに来たことがある、という感覚ではない。
この場所と似た風景を見た、という感覚でもない。
この感覚は、自分がこの異変に囚われる前に何度も感じたことがある。
今ではもう懐かしく感じる、平穏な日常生活の中で。
「何だっけ、この感じは？」
いくら考えても判らないので、とにかく歩く。心なしか、その歩みも速まる。
そして……。
「あ、家だ！」
遠方に、懐かしい我が家が、荒野の中にポツンと孤立するように佇んでいるのが見えた。
思わず駆け出しそうになり、ハッと思いとどまる。
「待てよ……」
何かが変だ。
何かがおかしい。
一体、何が？

そもそも、何故、我が家に戻って来るのだ？
いや、それだけなら別におかしくない。
こんな、何の目印もない、殺風景な世界だ。歩いている本人にそのつもりはなくても、実は無意識に大きな円軌道を描きながら進んでいて、元の場所に戻って来るなどということは、あり得ない話ではない。
今感じているのは、もっと別なもの。
何というか、生理的にもっと気持ちの悪いものだ。
徐々に近づいてくる、住み慣れたはずの一軒家なのに、全く別の建物に見える。
細部まで、自分の記憶と合致するはずなのに、何かが違う。何が？
そうだ！
逆なのだ！
全てがまるで、鏡に映したかのように反転しているのだ！
これが違和感の正体だった。
違和を感じさせる要因はもう一つある。
この、額から伸びている紐の行き先だ。
この紐は、真っ直ぐ一本、あの反転した我が家へと向かっているのだ。
これもおかしい。

自分は、自分の額から生えている紐を辿って、あの借家を出た。

この紐は、その持ち主、或いは宿主の進行に合わせて長さが縮むか、或いは進行方向に押し出されるかして、一定の張りを保っている。弛んだり、余ったりすることはない。

つまり、自分の後方に紐はない。だから、我が家の周囲に紐はないはず。それなのに、自分の額から生えた紐は、あの家に向かって伸びている。まるで家までの道標のように。

これは、一体どういうことだ？

考えていても始まらない。

とにかく行こう。

しかし、やはり怖い。

もう、何が起きても動じないつもりだった。こんな世界だから、もう何でもありだ。例え、目の前に巨大な怪物が現れたとしても、それほど驚かないだろう。

だがこれは想定外すぎる。感情が、今の状況にどう反応すれば良いのか判らずにパニックを起こしている。はっきりしない不安、ぼんやりとした恐怖、そして、それらに負けない好奇心。

やがて、何もかもが反転した以外は、我が家そっくりのボロい一軒家の門に到着し、吸い込まれるように、その中へと足を踏み入れる……。

＊

我が家へ帰ったのか、他人の家に訪問しているのか判らない、不思議な感覚。

昔、アパート暮らしだった頃、隣の部屋にお邪魔したとき、水道設備や間取りなどが自分の部屋と逆なのを見たときの変な感覚を思い出す。

紐は上の階へと伸びている。

靴を脱いで、玄関をあがり、廊下を通って階段を昇る。下手に見慣れた景色が反転しているものだから、初めて入る建物以上に勝手が違って非常に歩きづらい。

ようやくのこと、二階に辿り着く。紐は、自分のいつもいる、あの四畳半の扉へと伸びて、そのまま幽霊のように扉をすり抜けて、部屋の中へと伸びている。尤も、全てが逆向きなので、違和感が半端ないのだが。

いつもとは左右反対の位置にある、扉のノブへと手を伸ばし……そこで固まる。

いいのか？

自分の中で、警鐘が鳴る。

果たして、この扉を開けて、いいのか？

何故ためらうのか、自分でも判らない。しかし、今まで自分を動かしてきた衝動が、今

更になって鳴りを潜め、代わって自分の中に別な声が聞こえてくる。
『戻れ』と。
『もう、ここまでで結構。戻りなさい』と。

……。

扉の中には、〝何か〟のいる気配がする。
その〝何か〟と自分は、出会ってはいけない。
そう、自分の心が告げる。
『戻れ』
……。
……そうだ。ここでやめておこう。
この扉を開けてはいけない。

ようやく、そう腹が決まり、扉のノブから手を離したそのとき……。

ガチャリ。
ドアノブが回り……

扉の向こうの気配が近づき……
扉が開き……

部屋の中から、自分自身が出てきた。
いや、正しくは、全てが反転した自分。
風景とは違って、普段から鏡で見慣れていたから違和感のない〝それ〟は、
こちらに気づき、驚いて歩みを止めようとしたようだが、その勢いを咄嗟に消せず
……。

二人は接触した。

途端に……

バチンッ!!

全てが爆ぜたような気がした。

物凄いエネルギーが爆発した。
辺りに眩(まばゆ)いばかりの光が満ちたかと思った次の瞬間、一気に暗転して、重く深い闇の底へ落ちて、沈んでいった。

あとはもう、闇、闇、闇……。
何もない世界。
身体の方は、硬直したように、ピクリとも動かせない。そのうち、自分に身体があるかどうかさえも怪しくなってきたとき……。

何処かから、カッチカッチカッチと規則正しい音が聞こえてきた。
一体、何の音だ？
身体の感覚、それに次いで失われかけた意識が蘇り、音の正体を探る。
そして、ようやくそれが時計の音だと気づいた途端、徐々に意識がはっきりしていき、やがて・・・・・・

《『震エル紐』終》